

平成 21 年 6 月 5 日現在

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2007～2008

課題番号：19592471

研究課題名（和文） 看護におけるフィジカルアセスメントの重点内容を押さえた新しい教育方法の開発と評価

研究課題名（英文） Essentials in education of physical assessment and achievement targets at basic nursing level.

研究代表者

横山 美樹（YOKOYAMA MIKI）

国際医療福祉大学・保健医療学部・准教授

研究者番号：70230670

研究成果の概要：

教員対象の調査により、フィジカルアセスメントで教育すべき学習項目としては、全身のフィジカルイグザミネーション技術項目 60 項目のすべてが「必要あり」とされた。しかしながら、その学習到達目標レベルは、知識レベルのみでよいものからある程度の技術の習得が求められるものまで差が認められた。この結果をもとに、知識レベルのみの項目は講義、技術の習得を目指すものは演習を取り入れた教育プログラムを作成、展開、評価した。その結果、演習を取り入れた学習項目の方が学生の知識技術の習得度が高かった。

交付額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
平成 19 年度	900,000	270,000	1,170,000
平成 20 年度	700,000	210,000	910,000
年度			
年度			
年度			
総計	1,600,000	480,000	2,080,000

研究分野：医師薬学

科研費の分科・細目：基礎看護学

キーワード：フィジカルアセスメント、教育方法、看護、開発・評価

1. 研究開始当初の背景

(1) 対象の身体面を的確にアセスメントする「フィジカルアセスメント」に関しては、アメリカにおいては 1970 年代より基礎看護教育で教育が行われ始めたが、日本においてその導入が行われたのは約 10 数年前である。そしてフィジカルアセスメントの教育内容、教育にかかる時間数は、各教育機関においてかなり差が認められる。

(2) フィジカルアセスメント教育に関する研究はあまり多くはみられないが、

Secrest, J.A らが、卒業生と教員対象に、学部で教育されたフィジカルアセスメント技術 120 項目についての実施頻度について調査しており、この中で臨床場面で使われる技術の頻度には差があり、教育内容、方法の精選が必要である、としている。

そこで研究者は、我が国の看護師に必要なフィジカルアセスメント技術を明らかにするために、研究者の大学の卒業生のうち、フィジカルアセスメントに関する科目を履修した卒業生と、履修していない卒業生を対象に、看護師(助産師、保健師)としてフィジカ

ルアセスメント技術の活用の実態に関する調査を行った。その結果、やはり技術の使用頻度、項目による差が認められた。

そこで、看護基礎教育課程におけるフィジカルアセスメント教育で、何をどこまで教育すべきかの重点内容を明らかにし、限られた時間で必要な内容を効果的に教育すべきだと考えた。

2. 研究の目的

(1)フィジカルアセスメント教育に携わっている教員側からみた、看護基礎教育課程でのフィジカルアセスメント教育の重点内容および学生の到達目標を明らかにすること。

(2)上記1)の結果から、看護基礎教育課程で必要とされるフィジカルアセスメントの内容、到達目標にあわせたフィジカルアセスメントに関する教育プログラムを作成し、学生に実施し、その教育の評価を行うこと。

3. 研究の方法

目的1) に対して

(1)調査対象者の選定：全国の看護系大学124校に調査用紙を配布し、64校(51.6%)から回答があり、うちフィジカルアセスメントの授業を開講している47大学の48名の教員から研究協力への同意が得られた。

(2)調査用紙の開発：研究者がフィジカルアセスメントに関する教科書を参考に必要と考えるフィジカルイグザミネーション技術項目を選択し、調査用紙のたたき台を作成し、それをもとにフィジカルアセスメント教育に関する3名からなる専門家パネルを実施し、そこでの意見を整理、統合して調査用紙を改訂した。

(3)コンセンサスを得るための計3回のコンセンサス調査：各フィジカルアセスメント学習内容について、教育の必要性の有無、到達目標レベルについて、48名の対象教員に調査用紙を郵送にて配布。そのうち31名から回答が得られた。その結果を分析し、再度48名にこの結果を記載した調査用紙を送付し、あらためて各項目の教育の必要性の有無、到達目標レベルについて質問した。この2回の調査ではほぼコンセンサスが得られたが、13項目のみが51%以上のコンセンサスを得られなかったため、13項目についてのみ、再度3回目のコンセンサス調査を行い、前項目が過半数のコンセンサスを得た。

(4)A 大学看護学科の2年生を対象に、研究者が作成したフィジカルアセスメントに関する教育プログラムを実施し、筆記試験、授業終了後のミニテスト、演習時の口頭試問により、学生の知識・技術の習得度の評価を行っ

た。

倫理的配慮については、大学の倫理審査委員会の審査を経てから行った。

4. 研究成果

目的1) フィジカルアセスメントの重点内容、到達目標について

第1次コンセンサス調査では、48名中31名から有効回答を得た(有効回答率64.6%)。第2次コンセンサス調査、第3次コンセンサス調査では、33名中29名から有効回答を得た(有効回答率87.9%)。全60項目のフィジカルイグザミネーション技術項目(学習項目)は、すべての項目が「教育の必要あり」となった。到達目標レベルは、学習項目により差が認められ、「知識レベル」のみでよい項目と、ある程度の「技術の習得」が求められるものと、違いが認められた。このことから「学習項目を削減する」のではなく、各々のフィジカルイグザミネーション技術項目の到達目標レベルに応じた教育方法を、限られた時間数の中で効果的に行うための、教育内容、方法の工夫が必王であると考えられた。

目的2) 効果的なフィジカルアセスメントに関する教育プログラムの作成と評価

研究1)の結果に基づき、講義、演習、自己学習による教育プログラムを作成した。全10身体系統別アセスメントのうち、「胸部・肺」「心臓・循環系」「腹部・消化器系」「筋骨格系」「脳神経系」の5身体系統は、到達目標に基づき講義と演習を組み入れた。「頭部・顔面・頸部」「目耳鼻口」「乳房」「生殖器」「肛門」の5身体系統は、到達目標に基づき講義のみとした。演習を入れた5身体系統は、講義終了後のミニテスト、最終筆記試験共に正答率が60%以上であった。演習のない5身体系統項目は、最終筆記試験の正答率がすべて60%未満であった。講義と演習との組み合わせと比較して講義のみの場合は、知識の習得度が低い結果となった。最終筆記試験結果は、平均点66.7点(SD=±11.8)であった。演習時の評価では、「胸部・肺」「心臓・循環系」「腹部・消化器系」「筋骨格系・神経系」のすべてで60%以上の学生が、知識・技術ともほぼ習得しているA評価を得、B評価(一部あいまいな部分があるが合格レベル)をとあわせて90%以上が合格した。

この結果から、演習を入れた項目については、教育プログラムの実用可能性はあると考えるが、講義のみの項目は、教育プログラムの展開に工夫、検討が必要である。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計0件)

[学会発表] (計1件)

横山美樹、看護基礎教育課程における「フィジカルアセスメント」科目の科目終了時の到達目標に関する研究、第28回看護科学学会学術集会、2008年12月、福岡市

[図書] (計1件) (現在執筆中)

横山美樹著、メヂカルフレンド、
「はじめてのフィジカルアセスメント」
メヂカルフレンド社
2009年10月刊行予定
198頁(予定)

[産業財産権]

○出願状況 (計0件)

○取得状況 (計0件)

[その他]

6. 研究組織

(1) 研究代表者

横山 美樹
国際医療福祉大学・保健医療学部
・准教授
研究者番号 70230670

(2) 研究分担者

なし

(3) 連携研究者

なし